

最近タクシーに乗車して感じること

札幌市医師会
愛育病院

齋藤 誠

幼小児期から現在も距離の遠近に関わらず、タクシーを愛用している小生が最近、乗っていて思うところがあります。それは、“タクシー運転手の高齢化”であります。以前は（今でも多少ありますが）、タクシーに乗車する際、運転手に気を使う点として、1）距離が近すぎないか（基本料金で済んでしまう近距離だと行先を告げた後、微妙な空気が流れる）、2）一万円札以外のお金を持っているか（せめて五千円札でもかなり違う）の2点だったように思います。経験ある先生方もおられると思いますが、それぞれの理由で運転手がキレてしまったことが数回あったために意識するようになりました。今もまだそのような運転手がいるのかもしれませんが、かなり激減したと感じます。

それよりも最近気になるのは、70歳台（あるいは80歳台も？）と思われる高齢ドライバーが札幌に限らず、全国的に本当に増えたなと感じるのです（昨年、学会・研究会で行った東京や京都でもそうでした）。詳しくは分かりませんが、恐らく以前は年齢制限があったのか、明らかに“お爺さん”っぽく見えるような運転手はいなかったように思います。具体的な数は忘れてしまいましたが、そもそも札幌市内のタクシー運転手が減っているようであり、ひいてはタクシーそのものの台数が減ってしまったために、年末には30年前のバブリーな時代に戻ったのかと勘違いしてしまうほど、捕まえることが困難なこともあります。

先日、ちょっとしたハプニングがありました。当院から歩いても行ける距離の札幌医大に行く際に、いつもどおりタクシーを利用した時のことです。運転手は70歳台の後半と見受けられる、お爺さんドライバーでした。それだけでなく、医師の感性で何となく認知症がかっているなと嫌な予感を察知しました。乗車の際に行先を「医大まで」と言ったはずなのですが、目的地までのルートを微妙に外れそうになったので、問いただしたところ、「あれえ、北大って言いませんでした？」とのこと。嫌な予感の中しました。それだけで済めばまだ良かったのですが、問題はその後でした。医大前通りから医大に入る際に「入口」と「出口」を見誤り、「出口」から入って行きました。「こっちは出口なんですけど」と論ずるとバックのまま逆走し、対向車が勢い良く走ってくる医大前通りに戻ろうとしたのです。さすがの恐怖に小生も「やめてください！」と叫んでしま

いました。その二日後、また同じタクシーに乗ったところ、「お客さん、今、退院したの？ 入院長かったですか？ ご苦勞様でしたね」と声をかけられました。

症例提示が長引きましたが、これは小生が体験した実話なのです。本邦の高齢化は世界的に見ても突出しており、ここ数年、高齢ドライバーが巻き起こす悲惨な交通事故が後を絶ちません。これは医学会でも無視できないテーマになりつつあり、昨年に行われた第60回日本老年医学会学術集会（総会）でも一つのセッションとして活発な意見交換が行われていましたし、日本医師会認定の生涯教育講演会でも同様の内容を拝聴させていただきました。高木ブーさんなど運転免許証を自主返納される方も出てきています。このような一般ドライバーと違い、タクシードライバーには“危険な運転手はいないであろう”という神話でもあるのか、年齢規制あるいは認知症のチェックなどはされていないように思われます。このような状況なので、警戒し過ぎと言われてしまうのかもしれませんが、実車中に突然の事故に巻き込まれるリスクもあるので、最近はタクシーに乗車する際に運転手の年齢を推定しつつ、“この運転手に任せて大丈夫か”を考えてしまいます。先生方も小生のようなプチ恐怖体験に出くわさないとも限らないので、増えてきた高齢タクシードライバーの中には要注意な運転手が潜んでいるのかもしれないので、注意しておいた方が良いのでは？と思います。

